

県内のシロイチモジヨトウに対する薬剤の防除効果

1980年代以降県内で目立った発生がみられなかったシロイチモジヨトウが、2016年から淡路島の露地野菜圃場を中心に多発している。その要因の一つとして考えられる殺虫剤の防除効果の低下について調査したところ、数種の薬剤の効果が低いことが分かった。

内 容

2016年、淡路島の葉ネギ圃場でシロイチモジヨトウの多発生がみられ、2017年も多発状態にあり（写真）、秋期にはキャベツやタマネギにまで被害が拡大した。淡路島では近年、葉ネギの周年栽培が拡大しており、薬剤散布回数が多いことで、薬剤の防除効果が低いシロイチモジヨトウの発生を助長している可能性が考えられた。

そこで南淡路普及センターと連携して、2017年10月中旬に葉ネギ圃場2地点から採取した個体について、現地で使われている薬剤の感受性検定を行った。その結果、2地点で共通して、スピネトラム水和剤やシアントラニリプロール水和剤などの効果が高い一方、フルベンジアミド水和剤やエマメクチン安息香酸塩乳剤などの効果が低いことが分かった（図）。クロラントラニリプロール水和剤など、圃場間で効果に差異がある薬剤も確認され、使用薬剤の履歴により効果が異なる可能性が示された。



写真 シロイチモジヨトウによるネギの被害（左）と幼虫（右）

今後の方針

今回の検定で効果が高かった薬剤を中心に、ブロック式ローテーション※の考え方に基づく薬剤防除体系の構築を指導する。

今後も、薬剤の効果についてより正確な情報を提供できるように、引き続き、季節や地域、圃場、作物ごとに薬剤感受性検定を実施する。また、薬剤抵抗性の発達を防ぐためにも、交信攪乱剤^{かく}や黄色灯など、殺虫剤以外の防除技術を現場で活用しやすい形で導入できるよう検討する。

富原 工弥（病害虫部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-1222）

※ブロック式ローテーション：害虫1世代を1ブロックとして考え、ブロックごとに異なる作用機作の農薬を輪番に使用することで、抵抗性の発達を防ぐ方法。

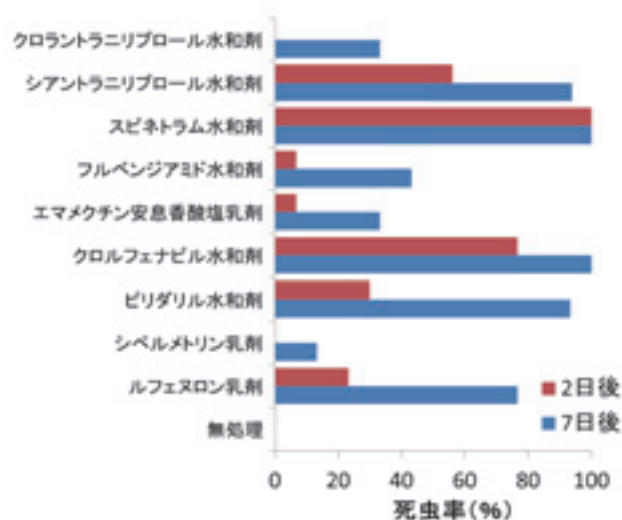


図 シロイチモジヨトウ3齢幼虫の各種殺虫剤に対する死虫率